

葬儀にまつわる習俗・俗信(迷信) 浄土真宗入門のてびきより

(1) 枕だんごは不要です

臨終勤行の前に、小さなだんごを四十九個作り、枕飾りの所に並べることがあります。故人が四十九日までにあの世へ旅する弁当だそうです。

浄土真宗の私たちは、お念仏に遇わせていただいたとき、往生・成仏の定まった身となります。臨終のときには浄土に往生させていただき、それは同時に成仏させていただくのです。これを「おうじょうそくじょうぶつ往生即成仏」といいます。旅をするではありません。したがって当然、このだんごは不要です。

(2) 旅支度はいたしません

遺体に経カタビラを着せ、てつこう手甲・きやはん脚絆にわらじ草鞋、杖という旅支度をさせ、頭に三角の頭巾をつけ、持たせたずだぶくろ頭陀袋を首にかけ三途の川の渡し賃の六文銭を入れるというところもあります。まさに「冥土への旅」、闇の世界へ旅立っていくということなのでしょう。

浄土真宗は、お念仏のはたらきで、臨終の時、光明の世界であるお浄土へ安心して行きませさせていただくのですから、旅支度はもちろん必要ありません。

(3) 守り刀は置きません

遺体の枕元や、胸の上に、小刀や目刀など刃物に類する物が置かれることがあります。これは、魔除け、死霊に対するおそ畏れから来るもので、魂が荒れることを防ぐため鎮めるためのものといわれます。

浄土真宗の念仏者は、すでに百重にも千重にも取り囲んで護ってくださっている如来さま方がいますので、心配することはありません。守り刀も不要なのです。

(4) 逆さごとはしません

故人の装束は左前、遺体の枕元に屏風を逆さまに置く逆さ屏風、湯灌ゆかんの時は水にお湯を注いでぬるくする逆さ水など、いずれも普段はしない逆さごとをすることがあります。これは死を恐れ、死者の魂がわざわいとなってこの世にか

えってこないようにという意味で行われるのでしょう。

これは故人が活着ている間にしてきたことと逆さまにすることで、死を活着ている物から遠ざけ、死者を生者と切り離そうとするものです。

死は悲しいことに違いありませんが、生から死を切り離すことなどできないことが知らされているのですから、死を嫌って、逆さごとなどする必要ありません。

(5) 一膳飯（ガキ飯）は不要です

枕飯・ガキ飯・一膳飯…地方によってさまざまな呼び名がありますが、故人の使っておられたお茶碗に、ご飯を一杯盛り、時には箸を立ててあることがあります。

これは死者の靈魂に食物を捧げることで、もっと古くは、ちゃんと供養されずに成仏できないでいる靈魂に対するお供えの意味がありました。成仏していない靈魂が良いところに行けず、残ったものに災いをもたらすと困るので、ちゃんと供養していますというしるしに箸を立てたのだそうです。

茶碗に一杯に盛ったご飯に、箸を仲立ちとして靈が宿ると考えられた、日本古来の考え方の名残でしょうが、浄土真宗の教えにはふさわしくありません。

浄土真宗でも、ご飯をお供えしますが、これは「御仏飯」といい、仏飯器に盛り、ご本尊である阿弥陀如来さまにお供えします。一膳飯などとはまったく違います。

なお、人としての命が終わるということは、仏として生まれることであるとして、通夜・葬儀の御仏飯に赤飯をお供えする地域もあります。

(6) 出棺時に茶碗を割りません

出棺に合わせて、故人が生前愛用しておられた茶碗をたたき割りそこにワラや半紙で火をつけるという習慣が残っている地域もあります。

これは、人間食べなきゃ生きられない、その主食の器をわざわざ割るということによって、故人に対して「もし間違っけて帰っけてきても、もう居る所はないよ」と、決別の宣告をしているのです。火をつけるのは、さらに念を押ししてい

るのでしょう。

亡き人が帰ってくるということは、残った者に災禍さいかをもたらす、といった誤った霊魂観によるものです。

なのに、「盆はかえってくる」と考えるのは一体どういうことでしょうか。

浄土真宗では、往生し、ただちに仏となられた方に、いつでも仏さまとなって私のもとへ還ってきて、導くはたらきをしてくださっているのです。

故人は、お念仏と共にあるのですから、「悲しいけれども、さびしくない別れ」が、お念仏の世界です。

茶碗を割るなどは、決してしてはならないことです。

(7) 一本線香は立てません

線香を一本立て、四十九日まで香の煙を絶やしてはいけない、というのもあります。二本立てると煙が分かれて、亡くなった人が迷う、香の煙と共に昇っていくのだから絶やしてはならないというのです。これも浄土真宗の教えにはふさわしくありません。

いつでも、抱き取って決して見捨てられないのが阿弥陀如来さまでありますし、命終の時ただちに仏にならせていただくので、線香の数・煙の数などで迷っている暇はないのです。

お香はご本尊である阿弥陀如来さまへのお供えです。ちなみに線香は立てずに、必ず寝かせて使います。

(8) お勤めの時以外にロウソクはつけません

故人は冥土（真暗闇の世界）へ旅立っていったので、お灯明を絶やすと迷うという人がいます。こんなことを言っている人の方が、迷っているのです。

浄土真宗の念仏のはたらきによって、阿弥陀如来さまのお浄土に往生生まれさせていただくのです。

お浄土は光明の世界ともいわれます。

お勤めの時は必ず点火しますが、その他の時は火の始末に注意してください。

(9) 友引にこだわりません

友引は六曜の一つですが、そもそも六曜は六輝ともいわれ、中国で作られた暦です。日本に伝わってから正式な暦としては、一度も用いられたことがありません。日の吉凶や勝負ごとを占うのに用いられたといいますが、根拠のない話です。

友引は、元は「留^{りゅうれん}連」と呼ばれていましたし、「共引」と書いたものもありました。勝負事、戦い、旅立ちに良くない日といったのが、良いも悪いも共に引きあって、あいびき、引き分けて、良い日でも悪い日でもないと変わり、さらに文字が変わると「友を引いていくから」この日は「葬式をしてはいけない」と変わってきました。

さまざまないわれが伝えられていますが、もともと仏教とは関係のないところで言われていたもので、その根拠も不確かなことです。このようなことにとられる必要はまったくありません。

いくら友引の日に葬式を出すことをさけても、いずれみんな必ず死ぬものです。お互いに老少不定のみです。日の善し悪しを言っている暇などありません。

「門徒物忌むこと知らず」といわれてきた心を大切にしたいものです。

(10) 浄め塩は不要です

最近地域によってはやっと少なくなってきましたが、清め塩ほど故人に対して失礼なことはありません。

故人をけがれたものとし、不浄なものにふれてきたから、清めねばならないという発想なのです。

ケガレとは、「穢れ」と書きますが、これを^{けが}気枯れと置き換えます。つまり、不浄なものにふれると、残った人の精気が枯れるという意味で、不幸をもたらすものだから、清めるということになるのです。

浄土真宗では、死を不浄とも、ケガレとも受けとめていません。大切な肉親や、親しかった人の死をなぜ穢れているなどといえるのでしょうか。先にもいいましたように、これほど失礼なことばはありませんので、絶対にやめましょう。

他にもまだまだいろいろありますが、葬儀・中陰等の習俗・俗信を考えると、何よりも大切にさせていただきたいのは、この私も必ず浄土に往生するということです。

遺族が故人を、けがれたものとして、また崇りをなすものとして畏れ、二度と帰ってくるなど茶碗を割って追い返し、塩をまいて清めるのと、故人は阿弥陀如来さまのおはたらきによって、お浄土へ行き、仏さまとしてお生まれになったのだから、阿弥陀如来さまのお徳を讃嘆することと、どちらが念仏者の葬式にふさわしいのでしょうか。

同じ念仏の内にご縁をいただいたものは「御同朋・御同行」と示されています。お念仏の仲間に、お敬いの心で「ありがとうございました。今度はお浄土で」というお別れを大切にするならば、念仏者として習俗・俗信にどう対応すればよいのかが見えてくるはずではないでしょうか。

判断に迷うときは、まずご縁の寺院に相談してみましよう。